

エペソ人への手紙 2：5－7 (パウロ)

Preface

今読みました聖書箇所には、不自然なくらい繰り返しイエス・キリストという言葉が出てきます。

イエス・キリストという言葉は、クリスチャンにとってはあまりにも当たり前すぎて、その意味を深く考えることが疎かになりがちかもしれませんが、聖書にイエス・キリストという名前が何度も反復して出てくる意味を、私たち聖書の読み手は、注意深く見ていく必要があります。

エペソ書 2：5－7においても、正直、イエス・キリストという名詞は5節に一回だけ書けば、それで十分意味が通じますし、むしろ滑らかな文章になります。

背きの中に死んでた私たちを、キリストとともに生かし、ともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。それは、私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした (パウロ)

キリストという言葉を一回にした方が、文章が遥かに滑らかになります。

にもかかわらず、著者の使徒パウロは、文章がぎこちなくなっても、敢えてキリスト・イエスという名前を3度も記しました。

なぜなのか？ 意図があったからです。

では、どんな意図なのか？

イエス・キリストの名前が抜け落ちては、神の慈愛もその限りなく豊かな恵みも理解出来ないだけでなく、来たるべき世々に、ありとあらゆる世代に、神の慈愛と限りなく豊かな恵みを示すことも出来ないということを忘れてほしくないという意図です。これは、とても重要なことですね。

クリスチャンの信仰生活において、時折陥る失敗は、イエス・キリストを単に救われる時だけ利用し、救われた後は、私たちの人生にイエス・キリストが登場してくることを拒むということがあります。

つまり、天国に行くのか行かないのかという霊的救済については、キリストの贖いに感謝できるけれども、今この地上における私の人生の生き方には干渉しないで欲しい、私の心が喜び、私の心の思うままに生きるからと、いつのまにかキリストを事実上手放してしまっているということが多分にあるということです。

これまでエペソ書 1 章から 2 章に至るまでの内容を見てきましたが、その内容のうち私たちが最も覚えていなければならないことは、イエス様は私たちをお救いになる時だけ関係を持たれる方ではなく、永遠のいのちを頂いた後こそさらに必要なお方がイエス様であるということです。

確かに、人が救われるためには、イエス・キリスト以外の方法は天の下に与えられていませんし、イエス・キリストこそ唯一の救いの門であり、救いの道です。

ですが、「イエス様によって私は救われましたが、そこまでです。もうそれ以上干渉しないでください」という信仰生活を事実上送っていることに、私たち気付けていないことが多分にあるということをパウロはよく分かっていました。

私たちこういう言葉を聞きますと、「私は違いますよ」という表情を浮かべてしまいますが、実際にそうなんだということを今朝は考えたいと思っています。

Part One

私たちの中に起こるすべての肉のわざは、私たちがキリストから逸脱しているから成るものです。

結局聖書が指摘している私たちの肉の实りの内、妬みそねみ、分派分裂、争い、憤りなどが起こる理由は、もちろん私という人が成熟していないからであります。聖書的に言うならば、「私が成熟する以前に、キリストを掴んでいるその手を放してしまったため」だと言います。

キリストに繋がっているならば、その方から命令を受けるでしょうし、その方から命令を受けた時に実る実りは、愛、喜び、平和、寛容、親切、自制、そして長く待つことのようなものであって、目に力を入れてにらみつけ、裁き、非難し、分裂を引き起こすというようなことではありません。

行き着くところ、信仰における成熟を、私たちの道徳感からとか、私たちの心の中から湧き上がってくる善なる思いによるものだと想像してはなりません。

私たちの心の奥底から湧き上がってくるものはいつでも肉の欲望であり、私たちの心から出てくるものの中で、善なるものは何一つないということを正直に認識するところから、信仰の成長は始まっていきます。

聖書の教える成熟とは、何か良いことを思えば、良いものが出てくるというものでは決してなく、電話線を切るがごとく、切るべきものを切って、そっくりそのまま一切合切、キリストへと私を繋ぎ、結びつけるということです。

私という人を、私自身何としてでもキリストへと繋ぎ留めておく行為、どれだけ私をその方へと結び付け、しがみつき、取りすがらせ、服従させるかの戦いが成熟であって、何かこうすごい高尚な思いのようなものが出てくるようにすることでは決してありません。

私たちは、救いに与ってそこで終わるのではなく、むしろ、そこからよりすべてをかけてイエス・キリストに繋がり続ける、枝が木にとどまり続けるようにイエス様にとどまるかが聖書の教える大事なメッセージのうちの一つです。

至る所、すべてのキリスト者に起こる誤りや間違いがあるとすれば、イエス・キリストを手放してしまったから起こると言っても過言ではないでしょう。

ただこの問題は、私たちをもう少し深いところへと誘います。

「イエス・キリストが私たちには必ず必要だから、その方を掴み続け、その命令に従いなさい」という渴いた条件や要求のような律法ではありません。

キリストを必要とし、キリストに繋がり続け、キリストが私たちのかしらであることに感動があるからこそ、相手側から要求される条件ではなく、むしろこちら側から願う願望であるということです。

エペソ 2：7にあるように「私たちに与えられたキリスト・イエスにある慈愛と限りない豊かな恵み」に感動を覚えるから、来たるべき世々に示したいと思わせるわけです。

強制ではありません。 力づくでイエス様を掴ませるわけではありません。

キリスト・イエスにある慈愛と恵みが限りなく豊かであることに感激し、喜んでイエス様に自分を結びつけ、繋げとめようと、そのことに全精力を注ぎだすところこそ宝だと思えるわけです。 決して無理強いではありません。

Part Two

ガラテヤ人への手紙 4：4－5（パウロ）

私たちが神の救いを語る時、いつも強調され画一的になってしまっているのは、「神様は私たちをとんでもないほどに愛した」ということばかりです。

それゆえに、神様が私たちを愛した愛が、神様側からするとどれほどに大きな犠牲を払ったのかということにまで考えが回りません。

実際神様がイエス・キリストを私達のために送ったことは、神様にとって喜びだったのでしょうか？それとも、悲しみだったのでしょうか？ どう思いますか？

もちろん、喜びだったことでしょう。

神様の言葉にならない愛と私たちを救い出すという熱心が、イエス・キリストを喜んで送り出したというのは事実です。

しかし、ただ単純に嬉しい楽しいというような喜びではありません。

そこには、神様自らご自分に刀を突きさすかのように胸を引き裂き、ご自身の懷に抱いているひとり子イエスを送った大きな痛みと苦痛を耐え忍ばれたという事を、私たち一度しっかりと想像する必要があります。

神の懷から送り出されたイエス様は十字架に架かれる時、神様の偉大なご

計画と大きな摂理の中で送られた事を誰よりもよく理解しご存知であったにもかかわらず、あたかも、全く知らなかったかのような裏切り行為を訴えるかのように、「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。

また、私たちよく知っているヨハネの福音書 3 : 16、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」という御言葉がありますが、「実に」と言うほどに神様が払われた犠牲と痛みがよく分からないために、ひとり子をお与えになったほどに世を愛されたということがピンときません。

「こんなどうしようもない罪人である私を愛してくださった」という自己憐憫のような感情までは湧きますが、その愛がどれ程なのか、どれ程の犠牲と痛みを神が担われたのかまでは、正直よく分からない考えが及ばないのが私たちです。

神様の愛をどれ程に理解しているか、両手いっぱい、体いっぱいでしょうか。実のところ、爪の垢ほどにも分かっていないのが私たちであり、それでも分かっていると思ってしまうのが私たちだと聖書は指摘します。

だから、今日の聖書箇所エペソ書 2 章のように、不自然なほどに、「キリスト・イエスにあって、キリスト・イエスにあって、キリスト・イエスにあって」という言葉を反復せずにはいられないわけです。

「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました」と第二コリントで言っていますが、罪を知らない方を罪とされたという神様とイエス様の苦痛や犠牲については考えが及ばず、「私は愛されている」という事だけに私たち集中します。

だから、自分の心を喜ばし、思いを満たすことばかりが大事ですし、目に力を入れて説き伏せようとし、責め立て、待てず、憤り、手を貸すことが出来ません。

イエス様に何としてでも繋がり続けるということは、キリスト・イエスがどれほどに大きな痛みを伴って私たちを救い出したのかを見続けることです。

そして、そこから一つの結論を導き出さなければなりません。

それは、キリスト者の言動において最も重要な尺度は、「どれだけ立派なことをしたのか、正しい行動を取ったのかではなく、どれだけ大きな犠牲を払ったのか」ということです。

キリストに倣う信仰は、投資ではなく、犠牲だということです。

Part Three

聖書は幸いにも、1000円を差し出すことと、1000万円を差し出すことを比較した時、単純に1000万円を差し出すことの方が大金だとか偉いなんてことは一切言いません。むしろ、そこにどれほどの犠牲が伴っているのかという尺度で、物事を判断してくれます。

貧しいやもめが生きる手立てのすべてである銅貨2枚を献金箱に投げ入れたことこそ、沢山持っている者が沢山投げ入れたよりもはるかに多くを投げ入れたと、その神様に対する心の面持ちをイエス様は評価して下さいます。

つまり、到底計り知ることの出来ない痛みと犠牲を悲しみながらも喜んだイエス様ゆえに、私たちがキリストを信じるようになってから、「我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というような、どんな犠牲を払ってきたのかを数えてみようではないかと、問うわけです。

イエス様を信じてから、世の人々の持つ貸借対照表を破り捨てて、負けて、敗れて、負けて、敗れて、イエス様ゆえに自分に死んだことがどれほどあるのか顧みてみましょうということです。

イエス様ゆえに、負けて、敗れて、自分に死んだことがないならば、私たちまだイエス様を知らないということになるでしょう。

もちろん、救われていないというわけではありません。

でも、その救いの真意をちっとも分かっていないということになります。

例えば皆さん、イエス様を信じたために狂ってしまいそうなほどに悩み倒し、胸を打ち、どれほど身悶えしたことがありますか？

イエス様を信じているがために、どんな犠牲を払い、どんな被害を受け、どんなプライドをへし折り、どれだけ金銭的に損をし、名誉を傷つけられましたか？

「ただじっと座っていて、特段犠牲も、損もしたことはありません」というならば、それこそ私たちが最も悲しみ、痛みを覚えなければならないところだと聖書は言うんです。

すみません。こんなことを言っているのは、皆さんを責めるためとかではなく、私自身がそう出来ておらず、このことにおいていつも失敗しているからです。まず自分自身忘れないようにするために、声を張って言わなくちゃならないんです。

私を含めすべての人間は、自ら進んで損をすとか、犠牲を払うなんていうことは、生まれながら備わっていないため、いつも犠牲を払うことにおいて失敗します。

ルカの福音書9章に行ってみますと、イエス様がこんなことを仰ったことがありました。

ルカの福音書9：57－58（パワポ）

2000年前のイエス様の時代も今と同じでした。

「この方について行けば、最低限食べる物に困ることはないだろうし、病気に

なる心配もないだろうし、もし病気になったとしても直ぐに癒して下さるだろうから」と思って、たくさんの人たちがイエス様について行きました。

ですが、そんな人々にイエス様はつきり言われます。

「狐にはマンションがあり、鳥には高級アパートがあるけれども、わたしには枕するところありません。それを分かってついてくると言うのですか。あなたがわたしについて来るとは何を期待し、何を要求してのことですか」と、咎めなさいます。

私たちの下心・魂胆を、イエス様よく分かっておられます。

「わたしについてきたら薬代が浮くと思っているのですか？ ご飯を作らなくていいと思っているのですか？ いや、それどころかわたしには、枕もあります」と仰る方について行くと決心したのが、私たちです。

で、皆さん、何を神様に求めますか？

「主よ、私があなたを信じて差し上げましょう。だから、今回だけは当たりさせてください」でしょうか？ もしそうならば、他をあたった方が良くかと思えます。

イエス・キリストを信じるとはそういう事ではないですね。

Part Four

ピリピ人への手紙 2：5－8（パウロ）

ここの箇所で大変な言葉は、「神の御姿」という言葉です。

神の御姿なるお方が、その在り方を捨てられないとは考えずに、ご自分を空しくされました。自ら進んで、無き者となりました。

福音書に記されているイエス様のなさったことを追っていきますと、驚くことに、ただ一度もご自身を弁護されたことがありません。

私たちへの救いを達成するためには弁護されますが、ご自身の名誉やプライドや正しさ・言いたい事のために弁護されたためしがないという事実を発見します。

十字架に架かれる前にピラトから尋問を受けた時も、ご自身のプライドを立てるなんてことは一切なく、自らを空っぽにされました。

ですが、そんなイエス様を信じている、信じると決心した私たちは何をしているのでしょうか？

イエス・キリストという名前とキリスト教という名前を、私という人をこの世にあって他の人よりも優れているという証明のためにしか利用していないならば、そのどこがキリスト教でしょうか？

そのようにして、どうやって、「私はイエスを信じている」と言えますか？

そんな風には、決して、「イエスを信じている」とは使えません。

なにとぞ、どうか死んでください。キリストゆえに、ご自分に死んでください。
私たちの中に残っているものが、あってはならないんです。

イエス様が、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死という恥辱の極みまで従われたために、私たちは今日、この場にいます。

そして、私たち皆すべて、そのイエス様のように恥辱の極みにまで従うために、呼ばれ召し出された者たちです。

私達を生かしてくださるのはイエス様であって、私たち自身ではありません。

キリスト・イエスにあって生かされ、天上に座らされ、キリスト・イエスにあって来たるべき世々に、その慈愛と限りなく豊かな恵みを私たちが死ぬことをもって、犠牲を払うことをもって示すことを神様は望んでおられます。

だから、責め立てる代わりに、祝福してあげてください。

それ以外、私たちが神様から命じられていることはありません。

「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ」です。

「復讐と報復は、わたしのもの」と仰るキリストを信じ、恥辱の極みにまで自分に死ぬのがキリスト教です。

大分きつい言い方かもしれませんが、もしそれが出来ないと仰るならば、どうぞ、そのように生きたいと思えるようになるまで、クリスチャンであることを休んでください。

大丈夫です。一度神様が神の子としてくださったならば、そう思えるようになるまで神様導いてくださいます。

ただし、言葉で言っても聞く時と、言葉で言っても分からない時とは、導かれ方に大分大きな違いが出てきますが、必ずや神様は、そう思えるようなところへと導いてくださいます。

旧約聖書の話が、全部そっくりそのまま、その話です。

「言葉で言った時に聞きますか、それとも・・・」

これがクリスチャンの運命です。

Conclusion

もちろん、私たち誰もが、イエス様のように一朝一夕にはなりません。

だからと言って、そう出来ていないことを「愛されているから」と開き直って、ふんぞり返ってばかりはいられません。

最低限、知っておかなければならないことがあります。

私たちがこの地上での生を終えるまでに、そうなれるのかは分かりませんが、少なくとも、知ってはいなければなりません。

出来ていない自分の胸を叩いて後悔することぐらいは、「出来ていない、口を開く資格さえもない」ということぐらいは知っておかなければなりません。

もし、これさえも無いならば、私たちクリスチャンとして、何かおかしいことになっているということです。

最後にイザヤ書 53 章を見てみたいと思います。

イザヤ書 53 : 7 - 11 (パワポ)

父なる神が、そして、イエス・キリストが何をされたのかを、必ずや、私たち覚えていなければなりません。

イエス様が痛めつけられ、苦しんだことについて、一度もご自身弁明したことなければ、不平を言ったこともないと事実を覚えていなければなりません。

なぜならば、それこそ、イエス様が神より任された仕事だからです。

では、こんなイエス様を信じるクリスチャンって何でしょう？

イエス様が歩まれた道に従って、施して下さった恵みを知り、後を継ぐことをもって、来たるべき世々に、すべての世代に父なる神の救いとその栄光の場への招待を示す者たちではないでしょうか。

恵みを受けた者としての分を果たすものではないでしょうか。

今日の聖書箇所のように、私たちがキリストに見倣って、耐え、やられて、死ぬことをもって、来たる世々に、神の慈愛と限りなく豊かな恵みを示すんです。

キリストに繋がりに続けることに命を懸ける者たちです。

他者を生かすために、キリストに繋がりに続けることに命を懸け、自分に死ぬことに価値を見い出せる者たちがクリスチャンです。

もしキリスト教に力が無いならば、それはただひとつ、クリスチャンが自分に死なず、他者に負けず、キリストに自分自身を従わせていないからでしょう。

私たちは、自分に死に、他者に負け、キリストに従うこの一つのために、存在し、呼び出された者たちです。

キリスト・イエスにあって、キリスト・イエスにあって、キリスト・イエスにあって、私たちはどう生きているのでしょうか？ そしてどう生きますか？

お祈りいたします。

祝祷：ピリピ人への手紙 2 : 5